

フンボルト・中南米の風景序説

——探検から調査への架け橋——

野 間 晴 雄

Latin America's Landscapes Viewed by Alexander von Humboldt: Bridge between Expeditions to Investigations

NOMA Haruo

Alexander von Humboldt (1769-1859), German great naturalist cum geographer, called Father of modern geography, went on an expedition of tropical Spanish colonies in Latin America, especially Venezuela, Ecuador, Peru, Mexico, Cuba in 1799-1804 under the support of Spanish Crown Family.

This paper aims to analyze his and accompanied botanist Bonpland's travelogues "*Relation historique du Voyage aux Régions équinoxiales du Nouveau Continent*". These enormous travelogues had published in three parts; 1814, 1819, 1825 separately. The last volume was published a quarter of a century after his expeditions!

In this connection, his writing style was not always chronologically, systematically and descriptively. I dare to say, if anything, amalgam of travel report, scientific interpretation, and comparative essay on the earth. He, of course, was conscious of writing his travelogues by filling his own collected observed scientific data during his travel, but in the end, his writings were mixed with some romanticism and a taste of idiographic harmony with nature and beauty. His landscape image was supported or enforced by scientific data, at least he tired, however, to put it more correctly, these were by no means scientific or academic reports in modern context. On the other hand, this feature has been fascinating many readers even in contemporary time.

1

アレクサンダー・フォン・フンボルト（Alexander von Humboldt：1769-1859）はプロシアの首都ベルリンの生まれで、近代地理学の父といわれた大旅行家であるとともに、植物学者、生態学者、博物学者、動物学者、地質学者、気候学者、民族学者など多面的な顔をもっている。生涯636もの著書・論文・書簡集を残した。原著の刊行当初まもない時期から、ドイツ語、フランス語、英語、スペイン語など多くの言語に翻訳され、18世紀後半から19世紀前半にかけての科学観と探検調査技術の発展に大きな貢献をした。

フンボルトは富裕な家庭に生まれて幼年期を家庭教師につき、ゲッティンゲン大学とフライバルク鉱山専門学校で学んだ。そののち上級鉱山技師として恵まれた地位に就いたが、ジェームズ・クックの第2回探検隊の隊員だったゲオルク・フォルスターと知り合い、彼とヨーロッパ旅行をしたことがフンボルトを世界探検へと旅立たせるきっかけとなったといわれる。

最晩年の著書『コスモス』がフンボルトの思想を最も凝縮したものだが、その発想の原点といえる膨大な資料は、1799～1804年まで、スペイン国王の許可を得た中南米の探検調査旅行で収集されたものである。30歳前半に行った畢生の大旅行の調査データの分析と考察、それに旅行記の執筆、その流布・宣伝に残りの3分の2の人生を費やしたとって過言でない。表1にフンボルトの主要年譜を示す。

表1 アレクサンダー・フォン・フンボルトの年譜

1769年	9月14日、ベルリンに生まれる。2歳上の兄が言語学者、プロシア宰相となったヴィルヘルム・フンボルト。
1777-87年	ベルリン・テーゲルの城館で、家庭教師の教育を受ける。植物学に熱中する。
1779年	1月6日 父アレクサンダー・ゲオルク・フォン・フンボルト（少佐）死す。
1787-88年	兄弟でフランクフルト・アン・デア・オーデルの大学に入学、経済学、官房学を学ぶが1学期で戻る。カール・ルードヴィヒ・ヴィルデノウに植物学の手ほどきを受ける。ベルリンに戻り個人授業を受ける。
1789年	4月25日、ゲッティンゲン大学入学。経済学、文献学、自然科学を受講。 9月24日～11月初旬、ゲッティンゲンの1・ファン・ゴインズとともにマインツにゲオルク・フォルスターを訪問、ゲッティンゲンに戻る。
1790年	最初の著作『ライン河畔の玄武岩についての鉱物学的考察』出版。3月25日～7月末、フォルスターとともにマインツからケルン、ブリュッセル、アムステルダムを経由してイギリスへ。帰路は革命のさなかのパリを経由。

1790-91年

ハンブルク、J・G・ピュッシュの商業専門学校で学ぶ。

1791年

6月14日、ザクセン王国フライベルク鉱山学校に入学。バーメン地方の中央山地を旅行。

1792年

2月27日、鉱山学アカデミー修了後、ベルリンに戻る。

3月6日、プロイセンの鉱山監督局試補、9月6日、鉱山長に任命される。

1793年

『フライベルクの植物』出版。7月、プロイセンに併合されたフランケンのアンスバッハ=バイロイト辺境伯領の鉱山の監督を任される。

1794年

5月8日～6月上旬、ポーランドとバーメンの鉱山視察。

7月、ハルデンベルク伯に同行してライン、ブラバントへ旅行。公務によりヴェストファーレン、ラインヘッセン、アイフェル山地へ旅行。

12月14日～19日、イエーナにゲーテとシラーを初めて訪問。

1795年

4月16日～20日、イエーナへの旅の途上、ガルヴァーニ電流の実験を再開。兄ヴィルヘルムとゲーテもこれに参加。

7月～11月、北イタリア、スイスおよびフランスのアルプスへの学術調査旅行。

1796年

7月、プロイセン王の命令で、ヴェルテンベルクに侵攻したフランス軍のモロー将軍との会見に旅立つ。

11月19日、母エリーザベト（旧姓コロンプ）死去。フンボルトはプロイセン官吏の職を辞職し、調査旅行の準備。

1797年

「刺激を受けた筋肉・神経繊維についての試論」を発表。

3月～5月、イエーナにいた兄ヴィルヘルムを訪問。ゲーテおよびシラーとの親交を深める。気圧計による高度測定の実験および天体観測による正確な位置確定の研究。

5月30日、イエーナからドレスデン、プラハ、ウィーンへの旅に出て、天文、植物学、地質学の研究を行う。ウィーンで熱帯地方旅行の準備。

1797-98年

97年10月末～98年4月末までザルツブルク滞在。レオポルト・フォン・ブッフとともにアルプス地方の調査。

1798年

4月24日、ザルツブルクからパリへ向かう。10月までパリ滞在。数学者ジャン・シャルル・ド・ボルダとともにパリの天文台で磁気偏角・伏角を測定。5月～10月までの間にたびたび研究結果をフランス学士院で報告。植物研究家のボンブランと知り合い、一緒にマルセイユへ行き、北アフリカ、エジプトへの航海の機会を待つが挫折。その間、トゥーロンなどへ多くの調査旅行。12月15日、ボンブランとともにマルセイユからスペインへ。

1799年

『大気圏の化学的分析についての試論』および『地中ガスについて』を出版。

バルセロナからバレンシアを経てマドリッド（2月23日着）へ調査旅行。スペインの王カルロス4世よりスペイン領アメリカへの調査旅行の許可が下りる。

5月13日、ラ・コルニャに向けて出発。6月5日、ボンブランとともにラ・コルニャからスペインのコルヴェット艦「ピサロ号」で新大陸に向けて出航。

6月19-25日、カナリア諸島に寄港、ティデオ山峰登攀7月16日、41日間の航海の後にクマナ（ベネズエラ）到着。11月18日までおもにクマナに滞在。9月4日、チャイマ・インディオ居住地における布教拠点への旅に出発。11月18日、クマナを立ちラ・グアイラへ、さらにカラカスへ。

1800年

1月、カラカス近郊のシリヤ山登攀。2月17日、オリノコ川調査の旅。3月27日、アプレ河畔にあるカプテン派修道会の布教拠点サン・フェルナンド着、リヤノス地域の調査終了。3月30日、河川調査旅行の開始。

4月15-21日、アトゥレスとマイプレスの大急流を見学。4月26日、サン・フェルナンドを出発しアタバボ川を上る。4月30日、テミ川に入り、さらに5月1日、トゥミニ川に入りサン・アントニオ・デ・ハビタまで

川を航行。ピミチンまで丸木船を陸送。

5月6日、ピミチンからネグロ川を下り、この旅の最南端サン・カルロス・デル・リオ・ネグロへ。5月18日、サン・カルロス・デル・リオ・ネグロを発ち、上流に向かってカシキアレ川との合流点まで上る。カシキアレ川を上流に向かい、オリノコ川との分流地点に到着。

5月21日、オリノコ川を上流へ向かいエスメラルダへ。5月23日、帰途につくため川下へ向かう。6月22日、アングストゥラ着。75日間、2250km河川調査旅の終了。7月10日、アングストゥラを発ち、ヌエバ・バルセロナに陸路で向かう。7月23日～8月26日、ヌエバ・バルセロナ滞在。11月24日～12月19日、ヌエバ・バルセロナからキューバに航海。

1801年

3月上旬までキューバ滞在。3月9日～30日、キューバからカルタヘナ（コロンビア）へ航海。4月21日～6月15日、マグダレナ川をオンドラまで航行。

6月15日～7月6日、ボゴタへ向かう、ボンプランと一緒に植物学者ホセ・セレスティノ・ムティスの歓待を受ける。

1802年

1月6日～10月21日、キトとエクアドル滞在、ピチンチャ火山とチンボラソ火山に登攀。

10月2日～12月5日、リマとその周辺滞在、さらにカリャオ～グアヤキルを経てアカプルコ（ヌエバ・エスパニーヤ）への航海。

1803年

3月23日、ヌエバ・エスパニーヤ到着。アカプルコからタスコを経てメヒコ（メキシコ市）への旅。4月12日～1804年1月20日までメヒコに滞在。

1804年

1月20日～3月7日、メヒコからプエブラを経てベラクルスへ。3月7日～4月29日、ベラクルスからハバナへ。キューバでの2度目の滞在。

4月29日～5月19日、ハバナからフィラデルフィアへ航海。ジェファーソン大統領の客として約3週間アメリカ合衆国に滞在。

7月9日～8月3日、フィラデルフィアからボルドーへの航海。新大陸調査旅行の終了。財産の3分の1を消費し、1万kmを踏破。8月27日パリ着、翌年3月までパリに滞在。

9月17日、フランス学士院にて「紀行概要」の講演（9月24日、10月15日および29日に続きを講演）。12月17日、物理学者ジャン・パティスト・ビオがフランス学士院でフンボルトとの共著論文「異なる緯度地点における地磁気の変化について」を発表。

1805年

1月7日、フランス学士院で「植物地理学 序論」の講演。『植物地理学』の刊行開始（1805-07）。

3月2日～10月末、イタリア旅行、プロイセンの大使としてローマに滞在していた兄を訪問。ナポリにゲ・リュサックとレオポルト・フォン・ブッフとともに旅行。ヴェスヴィオ火山登攀。

11月16日、9年間離れていたベルリンを再訪。年間2500ターラーの年金支給を受ける。

1806年

1月16日、ベルリンの自然研究者協会（Philomatistische Gesellschaft）で「アメリカの現住民と現存する遺跡について」の講演。

1月30日、ベルリン学術アカデミーで「植物の形態について」講演。

3月20日、ベルリン学術アカデミーで「大気圏上空における気温の低下および雪線の最下限高度について」講演。

10月27日、ナポレオン、ベルリンに侵攻。フンボルトは地磁気研究のための体系的な測量を実施。

1807年

2月22日、ベルリンを去り、1827年までパリに定住。旅行記『新大陸赤道紀行』シリーズ30巻刊行開始。

1808年

『自然の景観』出版。『ヌエバ・エスパニーヤ王領政治試論』出版開始（-11年）。

1810年

『アンデス山脈の景観およびアメリカ原住民の遺跡』出版開始（-13年）。

1811年

ウィーンへ旅行、兄を訪問。

1814年

『新大陸赤道地方の地理および自然図譜集』出版開始（-38年）

『新大陸赤道地方紀行』第1巻の出版開始（-17年）、第2巻の出版は1819年～21年の間に、また第3巻は1825年～31年の間に刊行。

3月31日、対ナポレオン同盟軍パリに侵攻。フンボルトはプロイセン王に随行し、フランスの学術機関に有利になるように介入を行う。6月、兄ヴィルヘルムとともにフリードリヒ3世の随行としてロンドン訪問。

1817年

2月、ロンドンへ旅行。

1822年

9月、プロイセン王の随行としてヴェローナ訪問。さらにナポリ訪問、ヴェスヴィオ火山に何度か登攀。

1827年

4月14日、パリを離れ、ロンドンを短期訪問、後にベルリンに定住。

11月3日、ベルリン大学において物理学的観点からの地球の考察（後に『コスモス講義』と呼ばれるようになる）の連続講義。その成功をうけてベルリン合唱協会でも講演。

1828年

ベルリンのドイツ自然学・医学学会第7回会議での座長をつとめる。

1829年

4月12日～12月28日、ロシア皇帝ニコライ1世の招待で、鉱物学者グスタフ・ローゼと動物学者クリスティアン・ゴットフリート・エーレンベルクを伴ってロシア・シベリア旅行。鉱物資源調査を行い、中国との国境まで到達する。

1830年～48年

枢密顧問官として、ほぼ毎年、外交任務でパリを訪問する。

1831年

『アジアの地質と気象断章』の出版。

1834年

1827年の講義をもとにした『コスモス』の出版に着手。

1835年

4月8日、兄ヴィルヘルム死去。

1843年

ロシア紀行『中央アジア』出版。

1845年

『コスモス、物理学的観点からの地球の考察』第1巻刊行（第2巻1847年、第3巻1850年、第4巻1858年、第5巻1862年）。

1848年

3月22日、ベルリンにおいて3月革命に殉じた人々の埋葬行列に参列。

1859年

5月6日、ベルリンの自宅で死去。

[資料] 大野栄二郎・荒木善太訳『新大陸赤道地方旅行(上)』(2001)、岩波書店、の年譜を中心に、山野(1998)、ガスカール(1989)などの著作から作成。網掛け部が中南米旅行の事項である。

この旅行では、次ページの表2にあげた当時の最新鋭の測定機器を持参して自然現象の観察と計測がなされた。その数値情報や知見は紀行文の中にも随所に散りばめられている。オリジナルな主題図化と自らのスケッチをもとにした銅版画などによる可視化は、何よりもフンボルトの著作を他の探検紀行文から峻別し際立たせるものである。

フンボルトは多分野で膨大な著作を残したため、伝記・評伝や研究書、翻訳は現在もなお刊

行され続けている。とりわけ筆者が専門とする地理学では、古典地理学の巨頭として長らく君臨してきた。日本の高等学校の地理教科書でも、リッターとならぶ近代地理学の幕開けを飾る人物として取り上げられ、名前だけは大学受験知識としてもつとに知られてきた。

表2 フンボルトが中南米大旅行に持参した機器一覧

1. ルイ・ベルトウの経度計、第27号、1器	2. ザイフェルトの小型クロノメーター、1器
3. ドロンドの色収差を補正した望遠鏡、1挺	4. カロシュの望遠鏡、1挺
5. 検査望遠鏡、1挺	6. ラムズデンの六分儀、1台
7. トラウトンの嗅ぎ煙草入れ型六分儀、1台	8. ル・ノワールの反射測角器、1台
9. ハーターの経緯儀、1台	10. カロシュの水平儀、1台
11. バードの四分儀、1台	12. ラムズデンの半円儀、1台
13. 伏角計、1台	14. ル・ノワールの偏角計、1台
15. 磁針、1本	16. ソシュールの磁力計、1台
17. 精密振り子時計、1台	18. ラムズデンの気圧計、2台
19. 気圧測定器具、2組	20. ポール、ラムズデン、ムニエ、フォルタンの温度計、相当数
21. ソシュールおよびドリユクの湿度計、2台	22. ベネとソシュールの電気計、2台
23. ポールのシアン計、1台	24. フォンタナの測気管、酸化窒素ガス入り、1本
25. ルブル燐測気管、1本	26. ポールの器具、1器
27. デュモティエの測鉛温度計、1台	28. ニコルソンとドロンドの液体比重計、2器
29. ホフマンの組立式顕微鏡、1台	30. ル・ノワールのメートル標準尺、1本
31. 側鎖、1本	32. 実験用天秤、1台
33. 雨量計、1器	34. 吸引管、多数
35. アウイの検電器、複数	36. 外気における液体の蒸発量を計測するための管、複数
37. 水平儀、1台	38. 小型ライデン瓶、複数
39. ガルヴァーニ電気計、複数	40. 様々な試薬
41. 小工具、きわめて多数	

(大野栄二郎・荒木善太訳『新大陸赤道地方旅行(上)』岩波書店、2001、46-51頁より作成)

2

私が学生時代に学んだ文学部の「地理学概説」の授業は、実質は近代ドイツ地理学史であり(水津一朗『近代地理学の開拓者たち』、地人書房、1974)、恩師の性向から両巨頭のうちではリッターに割かれた割合の方が多かったと記憶しているが、とにかく偉大な地理学者であるというイメージが私の脳裏に刷り込まれていった。その当時(約35年前)、フンボルトこそが地理学の最高峰として紹介・論評したのは野間三郎『近代地理学の潮流——形態学から生態学へ——』(1963初版・大明堂)であった。すでにこの時代に東南アジアの文化人類学の論客であ

った岩田慶治氏が旧制の大学院時代に取り組んだのがフンボルトを中心としたドイツ地理学史の方法論であったことを知り、意を強くしたことが思い出される。その後、刊行された『コスモスの思想——自然・アニミズム・密教空間——』（1978、NHK出版会、のちに岩波同時代ライブラリー146、1993に所収、さらに『岩田慶治著作集 第6巻』、講談社、1995所収）は、フンボルトを始点として東南アジアのカミ概念やアニミズム世界、象徴世界まで思索した人文書・哲学書として評価が高い。その後、山野正彦氏が『ドイツ景観論の生成——フンボルトを中心に——』（古今書院、1998）でフンボルトの相貌（Physiognomie）概念を、その前後の時代（18世紀から20世紀前半）の景観概念と比較検討した。さらに手塚章氏によるいくつか原典の翻訳（『地理学の古典』、古今書院、1991；『続・地理学の古典——フンボルトの世界——』、古今書院、1997）の労作や、田村百代（1993）氏によるフンボルトの自然画の思想が単発的に論じられてはいる。しかし、中南米大旅行のダイナミックな著述については原著で読むにはあまりにも大部なテキストゆえ、この旅行記の本格的な考察や分析は国内でも海外でも試みられてこなかった。フランス語圏研究者がドイツ語圏学者であるフンボルトを論じるためらいがないといえば嘘になるうか。

フンボルトが生まれたドイツでは、著名な地理学史研究者である Hanno Beck の浩瀚な書誌・学史研究（1959/61）をはじめとして、図録・図集を含めての多くの復刻や研究が蓄積されてきた。いまさら後学の、しかも学説史を専門としない外国人としての私とその巨大な壁に立ちむかうのは、関心はあっても萎えてしまうだけだという思いがこれまでずっと強かった。しかし、近年、アングロサクソン系、とりわけ近年の英国を中心とした新しい文化地理学、構築主義を標榜する人たちによって、帝国/植民地研究のコンテキストから、フンボルトとその時代が再考されている。たとえば Livingston（1992）などがそれに当たるが、フンボルトのフィールドワークの原点に立ち返っての研究ではなく、言説の時代的解釈が中心となっている。この流れにいくらかかりかかの異議申し立てをしたい、それが本報告のひとつの目的でもある。

3

そんななか、17・18世紀大旅行叢書Ⅱのシリーズとして、岩波書店からフンボルトの初期の主著である『新大陸赤道地方旅行』（全3巻）が全体の4分の3の分量の抄訳ではあるが、読みやすく、探検の場にいるような臨場感すら漂う名訳と訳注によって、身近に接することができるようになったことは何よりの僥倖である。

南アメリカの大河を航行している間、あるいは長い陸路の間に、私はごく簡潔な探査

記録をしたためた。またかなり規則正しく、しかもほとんど現地において、火山や高度によって注目すべき山岳の登山行を記述していた。けれども私の日誌執筆は都市に滞在する度に中断され、あるいは他の仕事によって自分には副次的な興味しかない作業を持続することは不可能になるのだった。執筆にあたっては、ほとんど全生活が自然の中で展開されている科学者の頭に去来する切れ切れな考えをいくつかでも記録すること、分類するだけの時間がない大量の事実をとりあえずまとめておくこと、自然と人々から受ける好悪様々な第一印象を記録することだけをめざしていた。こうして慌ただしく記された頁を基礎として大きな著作ができ、読者に示されることになろうとは当時思っても見なかった。なぜなら自分の探査行とは、科学に有益な資料を提供しこそすれ、旅行記の主たる魅力である様々な出来事の物語を提供することはほとんどないと思われたからである。

(大野栄二郎・荒木善太訳『新大陸赤道地方旅行(上)』岩波書店、2001、20-21頁)

フンボルトが生きた時代はヨーロッパの大航海時代がすでに終わり、新大陸へは渡航費用だけを負担すれば、往復の航海はさほどの困難を伴うものではなくなっていた。しかもスペインによるヌエバ・エスパーニャ創設(1527)からすでに270年以上が経過している。探検の主要な舞台となったベネズエラ、エクアドルのオリノコ川流域やメキシコ、キューバなどは、すでに植民地として十分成熟しており、各種の便宜も得られた。何よりもフンボルトは自分にとっては異世界であるスペイン王室にとりいって、スペイン領中南米の広域な調査が可能ならば獲得し、身の安全も確保されていた。しかも、フンボルトはこの中南米大旅行の1年前(1798)にはパリに居を移し、帰国後も1827年までの働き盛りの四半世紀を、調査データの分析や旅行記の執筆をパリで行った。

フンボルトにとって、ヨーロッパ、とりわけベルリンを〈みやこ〉とするゲルマン世界は、家族との桎梏もあり息の詰まるような堅苦しい場所であった。何よりもこの主著が最初はフランス語で書かれ、フランスからのヨーロッパ世界に発信することを念頭に置いたしたたかなジャーナリスト的な戦略も見え隠れする。探検記文学として読まれることをフンボルトは望んでいなかったと上の引用は示唆するし、その叙述形式もそれ以前の探検記とは明らかに異なる。『新大陸赤道地方旅行』は形式の上では時間を追った記述となっているが、その実、きわめて錯綜した内容構成となっている。その混沌さ乱雑さのかなたに潜む中南米の風景は、ラテン流思索と直感、そしてゲルマン思考と分析の絢爛なゴブラン織を彷彿とさせる。

本報告では、まず、このフンボルトの反ゲルマンとラテン世界への憧憬を前提とした行動

が、中南米の熱帯の風景をどのようにとらえて、しかもいかなる観察・計測という科学的調査と結びついていったか、その徹底した経験主義をこの大旅行記の多角的な読みこみによって考えてみたい。啓蒙とロマン主義のはざまに揺れ動きながらも、晩年の『コスモス』にいたる世界自然誌、世界自然学への構想のエッセンスをくみ取っていかうと思う。

探検がより学識のある人間によってなされるようになるにつれ、あるいは記述的な博物学や、地理学、経済学などの研究が志向されるにつれ、探検記は過去の特徴であった構成上のまとまりと素朴さを一部失うことになった。多種大量の題材を探検の途上で起こった出来事の叙述と結びつけることはもはやほとんど不可能になり、劇的と名付けてもよかった部分は純粹に記述的な断片によって置き換えられてしまう。堅実な教養よりも心地よい娯楽を好む多数の読者がこの変化で得るものはない。したがって探査行の間中、観測機器や蒐集品のおびただしい装備を引きずって行く者が彼らの関心を惹くことはほとんどないのではと危ぶんでいる。

(大野栄二郎・荒木善太訳『新大陸赤道地方旅行(上)』岩波書店、2001、22頁)

フンボルトは生涯独身で、多弁、誇大妄想的な性格もあって、遺した業績の内容の限界や文体、さらには男色の気のある私生活や精神生活についてまで、近年は批判や新知見も提出されてきている。私自身にとっては、フランス人作家ピエール・ガスカールによる伝記『探検博物学者フンボルト』(原題：*Humboldt l'explorateur*、邦訳：白水社1989)によって旧来の大学者という、ドイツ/ドイツ語圏学者経由の固定イメージが払拭されていった。多くの欠点を有しながら、がむしゃらに動き回り、したたかな交渉術を身につけながら、はるか先の曙光を確実にとらえ、それを図化・モデル化するセンスと視野の広さとバイタリティこそが私にとってフンボルトの魅力である。『新大陸赤道地方旅行』はフィールドワークの思想書・作法術として、現在の学としても読まれるべきだろう。

4

フンボルトの『新大陸赤道地方旅行』は全部が11部に分かれている。第1部は1799年6月にスペインのラ・コルニャを出帆し、カナリア諸島を経て大西洋を横断南下してベネズエラのクマナに到着するまでの航海とカナリア諸島での見聞を示す。

第2部～第5部は、ベネズエラのクマナとカラカスを基地として周辺地域を精査、訪問した記録であり、12章のように人文的な概観も加えている。第6部から第8部がオリノコ川を遡っ

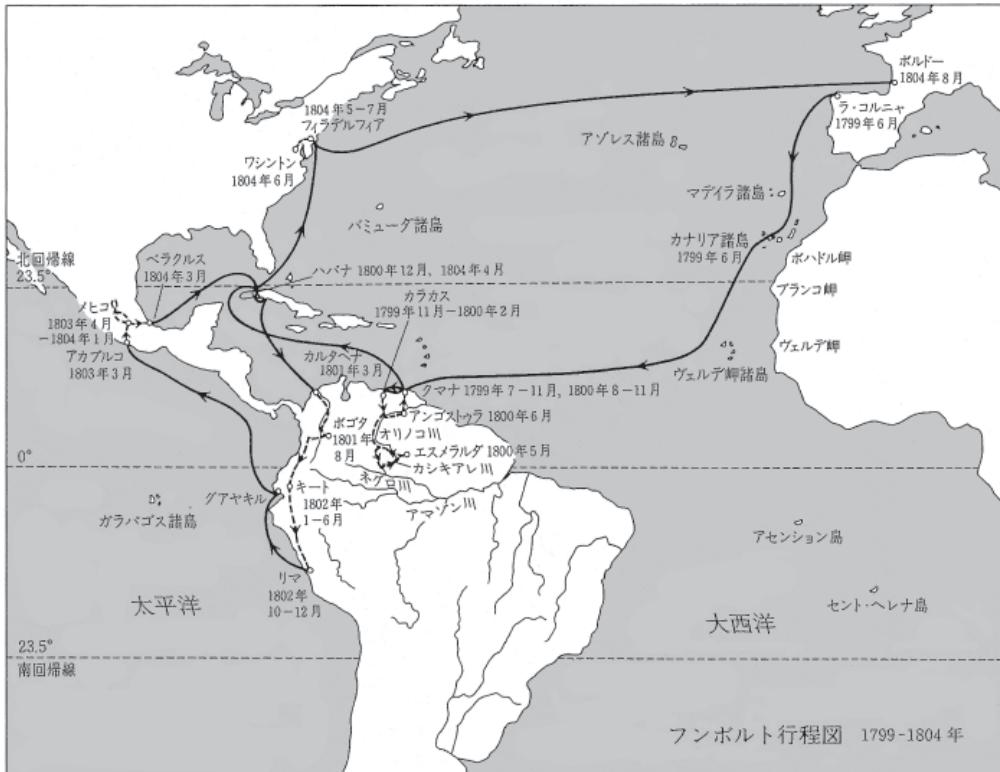


図1 フンボルトの中南米旅行の行程
 (アレキサンダー・フォン・フンボルト著、大野栄二郎・荒木善太訳
 『新大陸赤道地方旅行(上)』、岩波書店、2001、解説図より引用)

て、アマゾン川支流河川であるネグロ川の最上流にも踏査して、ポルトガル領のブラジルとの国境に妥当性を検討している。第9部がコロンビアの概観で、第10部は1800年10月～1801年1月に訪れたキューバ島の地誌である。最後の第11部は1801年3月に訪問したコロンビアのカリブ海沿岸の地カタルヘナへの航海とコロンビアの湿地の観察などで締めくくられている。オリノコ川とアマゾン川が支流で結ばれていると予想し、様々な動植物の調査を行った。コロンビアからアンデス山脈伝いにペルーまで困難な探検を行い、チンボラソ火山の山頂まで400mの地点まで到達しているが、その記録は本書には含まれていないし、メキシコの政治論なども別書で論じられている。

つまり、この紀行文はフンボルトの中南米大旅行(1799年6月5日～1804年8月4日)のうち、ペルーやエクアドル、メキシコを除いた前半部が記載されている。

表3 フンボルト『新大陸赤道地方旅行』の章構成

第1部
1. 準備・機器、スペイン～カナリア諸島、2. カナリア諸島のテネリフェ島
3. テネリフェ島～オリノコ川河口クマナ
第2部
4. 第一次クマナ滞在（マンサナレス川流域）、5. アラヤ半島
第3部
6. スエバアンダルシアの山間部、7. カリベの僧院・グアチャロ洞窟
8. カリベ、9. チャイマ族の特徴
第4部
10. 第二次クマナ滞在、11. クマナ～カラカス、12. ベネズエラ諸州概観
13. カラカス、シヤリ登山、鉱脈の比較
第5部
14. カラカスの地震、15. カラカス～アラグア谷、16. バレンシア湖～温泉地帯
第6部
17. リャノスの景観～カラボソ、18. アブレ川の船旅
第7部
19. オリノコ川、20. オリノコ川源流とアマゾン川源流
21. オリノコ川源流、22. オリノコ川源流
第8部
23. ネグロ川、24. オリノコ川上流
第9部
25. リャノス、ベネズエラ平原、26. ベゼズエラ連合州、コロンビア共和国
第10部
27. ベネズエラ～ハバナ、28. キューバ島の政治試論
第11部
29. トリニダード・デ・クーバ～カタルヘナ・デ・インデアス

第29章の最後に近い部分でフンボルトは次のように記している。

この「紀行」の遅ればせながらの刊行に際し——遅れの理由は関心の範囲をもっと限定した自然学の著作の刊行を優先させていたためだが——、私は自分より25年も後にアメリカに赴いた旅行者たちに先を越されることになった。しかしその最も本質的な部分に関する限り、以下の記述はいずれもヨーロッパに帰還後すぐに公にしていた場合と同様の新しさを今日でも失っていないと自負している。軍隊が縦横に踏破し、あるいは投機的な目的に導かれて数多くのヨーロッパ人が赴いた土地がすなわち既知の土地であると信じる人々は、確かにこうした主張を自惚れも甚だしいものと考えては違いない。だがこの本の著者が敢えて選択した視点に立つならば、右の主張は当然かつ異論の余地のないものに思われるはずである。18世紀の半ば以降、すなわちラ・コミンダス、ブゲ、ドン・ホルヘ・ファンおよびウリョアラが純粹に天文学的な方法による観測を行って以来、

私の旅の時代まで、ヨーロッパでは、極めて不完全な形であれ、地表の形状や山地帯の広がりや高さ、気候の変動ないしは平均気温、植物相およびその分布、土地の地質学的構造、あるいは地磁気の伏角や強度の変化等について扱ったものは何一つ出版されていない。独立戦争は地球のこの美しい地域をヨーロッパの産業と商取引に開放した。だが、その後、コロンビア共和国及びペルーについて公にされた書物の著者たちは、その職業あるいはおそらく知識の制約から、彼らが訪れた地方の自然地理に十分な光を当てるには至らなかった。私は自分の日誌の執筆にあたり、町の景観やその構造、様々な階級による衣服の違い、公共の設備、輸送手段等についてすでに述べられている事柄をすべて削除した。旅行記の読者を辟易させる論争については、特にこれを控えるように努めたつもりである。何よりも正確を期すことを心掛けた結果、同一の主題に関する他の人間の理解には敢えて拘泥しなかった。私の望みは自らの旅の物語にその場の状況に左右されない自立性と、自然学に関する著作としてのその本来の性格を維持することだった。この書物の著者が読者の想像力に対して、南アメリカの諸山脈と平野が織りなす自然の絵図、すなわち創造と破壊を繰り返す、強大で変化に富んだ自然の力を喚起し、大地の起伏とその上を縦横に走る河川の流れ、あるいは地表を覆う植物の層が社会の状態や諸制度、そして人々の運命に与える限りない影響を描き出すことにとりわけ意を用いたのはそのためである。

(大野英二郎・荒木善太訳 (2003) : 『新大陸赤道地方旅行 (下)』、岩波書店、4651-466頁、下線は野間による)

四半世紀後の旅行記の執筆に対する揺るぎない自信の表明は、データに裏付けられた自然学の絵図を文章で描くという、理系の数字至上主義とは異にする発想と、困難に立ち向かう孤高のフンボルトの姿勢がよく出ている。フンボルトは多くの著書において、自然界の諸要素(標高、気候、植生、動物、地質、地形、水条件など)の関連を空間配列した図式として示す多くの主題図や、地磁気と天体観測による絶対位置を示す空白地域の地図を作成している。それとは違うアプローチで同じ目的に収束するための紀行文、それが『新大陸熱帯赤道地方旅行』の性格であると私は考えている。

2008年1月24日のシンポジウムではフンボルトが描く中南米の風景の成立の背景などを、年譜からたどれる行程、調査機材や調査方法など、ごく一部の点から予察的に述べるにとどまった。そのため、シンポジウム当日は「中南米の風景」としたタイトルを、この要旨を記載した小稿では「中南米の風景序説」としたことをお許しいただきたい。後日、詳細なこの紀行文の

論理構造の分析と、メキシコやペルーなど後半の旅行も含めて考察することを目論んでいることを付記しておきたい。

主要参考文献

- Beck, H. (1959/1961): *Alexander von Humboldt*, 2 Bde. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Beck, H. (1993): *Alexander von Humboldt KOSMOS Entwurf Einer Physischen Weltbeschreibung Teilband 1, 2*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Berghaus, H. (1852): *Physikalischer Atlas*. Justus Pertes, Gotha. Bd.2 (5.Pflanzen-Geographie).
- Buisseret, D. (2003): *The Mapmakers' Quest: Depicting New Worlds in Renaissance Europe*. Oxford University press, Oxford.
- Gascar, P. (1985): *Humboldt l'explorateur*, Paris (沖田吉穂訳『探検博物学者フンボルト』, 白水社, 1989).
- Humboldt, A. de et Bonpland, A. (1814-25): *Relation historique du Voyage aux Régions équinoxiales du Nouveau Continent, fait en 1799, 1800, 1801, 1802, 1803 et 1804*. Schoell, Paris. I (1814), II (1819), III (1825).
- Humboldt, A. (1991): *Reise in die Äquinoctial-Gegenden des Neuen Kontinents*. Insel Verlag, Frankfurt.
- Humboldt, A. (1993): *Kosmos: Entwurf einer physischen Weltbeschreibung*. H. Beckhrg. Studierausgabe, Bd7.
- Kellner, L. (1963): *Alexander von Humboldt*. London: Oxford Univ. Press.
- Krätz, O.: *Alexander von Humboldt Wissenschaftler-Weltbürger-Revolutionär*. Callwey Verlag München.
- Livingston, D. N. (1972): *The Geographical Tradition*. Blackwell Publishing.
- アレクサンダー・フォン・フンボルト著, 大野英二郎・荒木善太訳 (2001-03): 『新大陸赤道地方 旅行 (上) (中) (下)』, 岩波書店.
- 岩田慶治 (1954): アレクサンダー・フンボルト序説——アメリカ旅行の意義——, 人文研究 (大阪市立大学) 5(2), 13-29頁.
- 岩田慶治 (1955): 《コスモスの背景》, 人文研究 (大阪市立大学) 6-12, 1-17頁.
- 岩田慶治 (1959): アレクサンダー・フォン・フンボルトの人と地理学, 地理4(3), 47-56頁.
- 岩田慶治 (1976): 『コスモス思想』, NHKブックス.
- 大森道子 (1982): アレクサンダー・フォン・フンボルトとゲーテ——植物学, 地質, 鉱物学, 運河をめぐって——, 立正大学教養部紀要15, 62-89頁.
- 佐々木博・田村百代 (1986): Hanno Beek「Alexander von Humboldt 研究史」および「Alexander von Humboldt の談話」, 筑波大学人文地理学研究10, 189-224頁.
- 水津一郎 (1974): 『近代地理学の開拓者たち』, 地人書房.
- 田村百代 (1993): A. von フンボルト『コスモス (第1巻)』における『自然画』の思想, 地理学評論66 (Ser. A)-5, 253-268頁.
- 手塚 章 (1990): アレクサンダー・フォン・フンボルトの地理学思想, 筑波大学人文地理学研究14, 107-143頁.
- 手塚 章 (1991): 『地理学の古典』, 古今書院.
- 手塚 章 (1997): 『続・地理学の古典——フンボルトの世界——』, 古今書院 (内容は第1部, 熱帯アメリカ旅行のあらまし, 第2部, 『自然の眺望』のうちの「ステップと砂漠」の一部, 第3部, 『植物地理学試論』のうちの「熱帯地域の自然図」の邦訳).
- 野間三郎 (1963): 『近代地理学の潮流——形態学から生態学へ——』, 大明堂.
- 山野正彦 (1998): 『ドイツ景観論の生成——フンボルトを中心に——』, 古今書院.